ＮＰＯ法人　宿木　・　太田宿中山道会館　（美濃加茂市）

中心市街地

活性化・歴史

取組の背景

太田宿は中山道51番目の宿場であり、江戸時代、尾張藩太田代官所が置かれ尾張藩の美濃国支配（5万6千石）の拠点として位置づけられたとともに、木曽川の渡し（太田の渡し）のある宿場として栄え、現在も全国的にも貴重な脇本陣や街並みが残るなど、歴史と文化を感じさせるまちとなっている。

国鉄の開通とともに、美濃太田駅周辺が中心街となったこともあり活気がなくなったが、昭和57年、美濃加茂商工会議所青年部会員が中心となり「中山道若衆会」を設立。中仙道を活かしたまちおこし活動を始めた。

取組の概要

ＮＰＯ法人宿木（以下、宿木という。）は、美濃加茂市が公設民営により「太田宿中山道会館」を運営することとしたことを受け、その受け皿となるべく設立されたもので、太田宿中山道会館の開設ともに指定管理者として会館の運営にあたっている。

宿木は、中山道太田宿の活性化を担う3団体（中山道若衆会、太田宿草鞋の会、中山道発展会）が母体となっており、会館の運営のほか、太田宿の歴史と文化の発掘及び発信、ウォークラリーの開催などを行うこととしている。

宿木理事長である藤井昭司氏は、太田宿草鞋の会員として以前より活動しており、宿木設立とともに理事長に就任した。

会館館長である三澤照一氏は、以前は日本昭和村（㈱ファーム）の造営時から関わり、開館時より館長として会館の経営、物品販売促進などを担当している。

取組の内容

- 昭和57年、中山道の歴史と文化を活かしたまちづくりを進めるため、美濃加茂商工会議所青年部会員を中心に「中山道若衆会」を設立。会員は13人程度であったが、日本一長い綱引き大会を開催するなど、太田宿からの発信を始めた。
- 昭和58年、木曽川の大洪水により太田宿界隈は全滅。まちを復興しようと、昭和60年から、若衆会が中心となって「中山道まつり」を開催。今に続く花火大会などを始めた（現在は、おん祭ＭＩＮＯＫＡＭＯとして、市民にも親しまれた美濃加茂市を代表する祭りとなっている）。

  また、太田宿の雰囲気を盛り上げ、まちに統一感を出そうと「木灯籠」70基を設置した。
- 昭和62年、若衆会が全国の中山道の宿場（まちづくり団体）に呼びかけ、街道の歴史を再認識し、連携することにより新たな情報発信を行おうと、太田宿において「第1回中山道69次宿場会議」を開催。平成17年に再び太田宿において「第19回中山道69次宿場会議」が開催された。今も、新たな会議参加宿場があるなど、宿場からの発信は更なる発展を見せている。
- 平成11年、美濃加茂市民70人程度による「太田宿草鞋の会」が発足。草鞋の会では、中山道の歴史と文化の継承を目的に活動しており、太田宿の旧商家を改造した休憩処「小松屋」の運営や初釜会、写生大会、写真展の開催など太田宿を中心とした活動を行っている。
- 平成13年、太田宿界隈をはじめ美濃加茂市内全域の50店舗が「中山道発展会」を設立し、盆踊りなどのイベントの開催や年末の売り出しなどを行い、まちの活性化を担っている。
- これらの団体が協力しながら太田宿の活性化を図ってきたが、平成15年、日本昭和村の開園とともに、多くの観光客が美濃加茂市を訪れるようになったことを受け、日本昭和村の観光客を日本ライン下りや太田宿に足を伸ばしてもらうことや宿場町の伝統を後世に伝えるために、太田宿に複合型観光施設を建設しようとする動きが見受けられるようになった。
- 平成15年、3団体が中心となって「中山道会館建設推進協議会」を設立し、中山道会館の早期建設と運営に関しては地域住民で組織するＮＰＯ等が運営する公設民営方式を美濃加茂市に提言した。
- 同協議会では、会館の建設コンセプトを探るために、市とともに市民によるワークショップを開催し、会館の在り方について検討を重ねた。
- 地域住民による会館の管理運営を目的としたＮＰＯ法人設立については、平成17年9月、3団体が中心となってＮＰＯ法人宿木を設立（平成18年1月認証）した。宿木は、会員46人であるが、市有施設を運営することを目的としていることから、広く法人の理事を選任し、3団体関係者は2人に留めるなど、公益性を強く意識

した組織づくりを行っている。
・美濃加茂市は、会館に対し市で初めてとなる指定管理者制度を導入し、宿木を指定し、平成 18 年 4 月 15 日、太田宿中山道会館が開館した。
・会館は、観光・交流・文化をコンセプトに、太田宿のにぎわいの再現や本陣の調度品の展示、市内の特産品の販売など、美濃加茂市の魅了を伝える観光施設として機能しており、各種イベントや朝市などを開催し集客に務めている。

成果

・太田宿観光の拠点として多くの団体客や個人客が来館している。当初の年間入館者の目標は 5 万人だったが、開館半年で 4 万 9 千人を数えている。家族連れや街道を歩く観光客に混じり、福祉施設のお年寄りや障害のある方なども訪れており、市民に会館の存在が知られるようになってきた。
・会館の物販スペースが徐々に大きくなっている。これは、来館者が多くなるに従い、物販量･額も伸び、会館の販売担当者も納入業者も販売することに対して良い意味で「欲」が出てきたことによる。
・中山道は、美濃加茂市の歴史的資源であるが、住んでいる市民にはその魅力や価値は見えづらいものである。しかし、会館ができて外から人が来るようになり、外からの目線により中山道太田宿の価値が市民にも高まったといえる。

成果の要因

・宿木は設立後、間もないが、設立母体である中山道若衆会は昭和 50 年代から 30 年に及ぶ活動の集積があり、そうした活動の実績が中山道会館の成功に大きな力を発揮したものと思われる。
・太田宿に足らないところ、観光施設として必要なものについて多くの市民とともにワークショップを行ったことが、太田宿についての新たな関心を呼び起こすこととなったと思われる。
・三澤館長の着任時には、物販納入業者も商品の納入及び販売に慣れておらず、会館側が請求するまで商品の補充にも来ない有様だったが、売上が上がるにつけ、三澤館長のアドバイスもあり商品の売上に関心を示すようになり、地元業者には新たな刺激となった。商品が売れるという成功体験が商店主らのやる気を引き出したと言える。

今後の課題

○川と中山道を活かした観光事業の推進
　太田宿の活性化には更なる集客が必要と考えている。人が来れば店が来る。植栽や案内板の統一など、修景地区としての指定を望んでいる。川と中山道を組み合わせた事業や観光ボランティアガイドと連携した太田宿全体の観光事業を進めようとしている。また、宿木では日本ライン下りの発着場の誘致を考えているが実現するためには克服すべき課題や規制が多い。
○行政との連携
　歴史を活かした街並みづくりが必要と考えている。まちの活性化を担う市民団体は育っているが、街並みづくりは市民だけではでき無いと考え、行政との連携・タイアップが必要としている。
○活動スタッフの高齢化
　今後は、新たな目標をどこに置くかが大きな課題である。中山道若衆会も活動を支える会員の高齢化しており、新たな世代をどのように活動に取り込むかが課題である。ただ、藤井理事長は、「まちづくりは、自分の生業（家業）や子育てに追われる現役世代では無理。団塊の世代も第一線を退くこれからがまちにも目を向かせる好機である。若いうちは一般社会で経験を積んで、それらを退職後にまちづくりに活かしてもらえばと考えている」と語り、大きな心配はしていない。
○会館の管理運営
　現在、美濃加茂市から指定管理を受け、ＮＰＯ法人宿木が会館の管理運営を行っているが、市からの管理委託費だけでは運営が困難であり、最低限の施設保持と人件費だけがまかなえる状況にある。自前の活動資金の調達と管理委託費の増額について市との協議が必要である。

行政への期待

　宿木では、美濃加茂市が太田宿をはじめとする中心市街地をどのように考え、どのような地区としていきたいのか、観光客の集客に何が必要なのかを考えるうえで、更なる連携を求めている。

この人にお話をうかがいました！

ＮＰＯ法人宿木理事長　藤井昭司さん
太田宿中山道会館館長　三澤照一さん

調査日：平成１８年１１月２２日（水）
調査者：中濃振興局 山田